次代へつなぐために

～被爆遺構の保存と継承～

原爆投下から今年で68年。「70年間は草も木も生えぬ」といわれた長崎は復興し、平和を世界に発信する都市となりました。

しかし、原爆被災からしだいに復興していくにつれ、市民の生活様式やまちなみが変化し、被爆の痕跡がしだいに薄れてきています。

また、被爆の実相を語れる人が減ってきているなか、原爆の恐ろしさと平和の尊さをどのように継承していくかという問題に今、直面しています。

そのような中、国の文化審議会から答申がなされ「原爆の凄まじさや破壊力を被爆当時と同じ場所で、みる人に伝えるものとして」旧城山国民学校校舎、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎医科大学門柱、山王神社二の鳥居の4件が長崎原爆遺跡として国の文化財に登録される見込みとなりました。

これまで、所有者をはじめとした、関係者の皆さんの努力によって、保存・継承活動が行われてきた結果です。登録後は、国も遺構の保存に関わることになり、今後の力となることが期待されます。

この継承の動きをさらに高めていくために、あなたもこの機会に改めて、「次代につなぐために必要なこと」について考えてみませんか。

被爆継承課　☎ 844-3913

もの言わぬ「証言者」

今回登録される4つの遺構は、全て日常生活でごく普通に使われていたもの。「あの日」を境に証言者となった。戦後復興などで、多くの遺構が失われるなか、68年たった今でも、原爆のすさまじさを、静かに語っています。

被爆者はこの一帯を通り地獄絵さながらに山へ避難した。（石田壽氏撮影／長崎原爆資料館蔵）

山王神社二の鳥居

爆心地から南東約800mに位置する山王神社二の鳥居は、秒速200m（大型台風の4～5倍）にもおよぶ原子爆弾の猛烈な爆風により倒壊し一本柱となりました。また、柱には、鳥居の奉納者の名前が刻まれていましたが、爆心方向に面した部分には、熱線の影響と思われる剥離（はくり）などが見られます。

境内入口の市指定天然記念物となっている大クスとともに、平和学習や被爆遺構めぐりをするかたに、原爆被爆の状況を伝えています。

旧城山国民学校校舎

校舎の中央に見える高い棟が、現存する階段棟。（林重男氏撮影／長崎原爆資料館蔵）

爆心地から西約500mに位置する城山国民学校は、爆心地に最も近い国民学校で、内壁には、原子爆弾の強烈な熱線と、その後の火災で生じたと思われる木煉瓦の焦げ跡が今も残っています。校内には、二股クスや嘉代子桜など、原爆にまつわるさまざまな遺構があり、平和学習に活用されています。

現在の被爆校舎は、昭和50年代に老朽化などの理由で校舎の建替えが行われる中、市民運動で北側校舎の階段棟が保存されたものです。

その後、在校児童の発案で「城山小学校平和祈念館」として保存整備がなされ、内部が公開されるようになりました。

現在は、年間3万人を超えるかたが訪れ、平和の大切さを学んでいます。

旧長崎医科大学の被害の様子。手前は小児科病棟。
（米国陸軍病理学研究所返還写真／長崎原爆資料館蔵）

旧長崎医科大学門柱

被爆当時、長崎医科大学には76棟の建物がありましたが、ほとんどが爆風で倒壊しその後火災で焼失。学長以下、教職員、学生など約９００人が死亡しました。

この門柱は、原爆で９センチずれ、台座との間に最大16センチもの隙間ができています。この傾きや隙間については、爆風圧の推定に用いられるなど、原爆被害の調査に重要な役割を果たしました。

現在は、同大学の被害の大きさを伝え、訪れるかたの慰霊の場となっています。

旧天主堂は壁を一部残し崩壊。写真中央下が旧鐘楼。
（H.J ピーターソン氏撮影／長崎原爆資料館蔵）

浦上天主堂旧鐘楼

旧天主堂は、明治28年に起工し、信徒によって、30年もの歳月をかけて建てられました。

鐘楼はこの天主堂に二つありましたが、原爆により一つは天主堂内に落下。もう一つは、天主堂のすぐ近くの崖を滑り落ちて、小川の真ん中に落下しました。この小川に落下したものが、現地で保存されています。

旧天主堂は、昭和33年に解体され、翌年再建されました。また、遺壁の一部は、原爆落下中心地に移設されています。この鐘楼は、浦上天主堂における被爆の実相を伝える、数少ない遺構です。

保存・継承に必要なものは「人の心」

私はあの日、三菱造船所飽の浦工場で働いていました。原爆投下翌日、浦上の自宅へ戻ったのですが、川の中に真っ黒になった人間が折り重なっていました。生きているのか死んでいるのか分かりませんが、足音が聞こえたのでしょう、「水…水…」という声が聞こえますが、川は水も見えないほどの人間の山でした。その川の先に鐘楼があったのです。だから、鐘楼とともに原爆の記憶がよみがえります。

鐘楼が登録記念物になるということについては、教会単独の保存活動には限界があるので、素直にうれしいです。しかし、遺構は保存だけでなく、人が継承をしていかないと意味がないのです。保存だけで、なぜ残されているかという意義を知らないと、心に響かず、「保存・継承しよう」という気持ちにならないでしょうから。

だから、ここを訪れるかたには、教会の存在意義を知ってほしいですね。教会が建った歴史や鐘楼が残された意味、そして礼儀も知っていただければ、心にきっと響き、保存・継承につながると思います。

ある学校は、熱心に教会の歴史や平和教育をされていて、感想文まで毎回いただきます。うれしいですよ、通じていることが目に見えてわかりますから。

しっかりと、次の世代が受け継いでくれることを私は願っています。

浦上天主堂旧鐘楼の保存・継承を行う
深堀　繁美さん

継承に必要なもの

被爆遺構を残すことは被爆の実相を伝えるものとしてとても大切です。しかし、被爆者の思いを次代へつなぐものは「人」。今、若い力が継承活動をしていること、知ってください。

「孫」世代の継承活動

毎年8月8日と9日に、全国の平和使節団が被爆の実相や平和の尊さについて学ぶ「青少年ピースフォーラム」を開催しています。その企画・運営をしているのが「長崎市青少年ピースボランティア」です。

彼らは被爆者の「孫」にあたる世代が中心で、このフォーラムでは、平和学習の進行や、県外からきた人たちへ被爆建造物等の案内などもしています。

本番に向けての練習は、定期的に原爆資料館などで行います。遺構などの知識習得にとどまらず、「どうすれば伝わるか」ということを意識しているところに、継承への強い思いを感じました。

この活動を続けている、西本千尋さん（純心高校3年生）、祖母の八木道子さんに、継承への思いを聞きました。

原動力は「祖母の思い」

「おばあちゃんは私のお手本」。そう語る西本さんがピースボランティアの活動を始めたのは高校生から。

小さなころから、祖母から原爆と戦争の話を聞いてきました。「ごはんつぶを残したらダメよ」食事の時も、このような話から、よく戦時中の食事の苦労話を聞いてきたのだそうです。

「おばあちゃんの思いを、もっと他の人にも伝えて、平和について考えてもらおうと参加したんです。残酷で辛い体験を乗り越えて、おばあちゃんは語り継ごうとしています。この思いを大事にしたい」。西本さんにとって、祖母はこの活動の支えにもなっています。

若い力に期待したい

そんな西本さんの祖母、八木さんは、小学1年生の時に、鳴滝町で被爆。「兄妹5人で、静かに飛ぶ飛行機に手を振っていたんです。そしたら『ピカ!!』と。まさか、あれが原爆を落とすとは」と当時を振り返ります。

八木さんは現在、語り部として学校などで継承活動をしています。まだまだお元気ですが、被爆者の高齢化などを憂い、若い世代が、継承活動を行うことを願っています。

また、「遺構の保存は大事。目から消えるものは、記憶からも消えますからね…。また、語る人がいないと、心に訴えることができません。だから、こ

青少年ピースボランティア

15歳以上30歳未満の青少年が、被爆の実相や平和の大切さを学び、伝えるために、年間を通じて活動しています。被爆建造物等のフィールドワーク、留学生や県外の学生との交流、平和祈念式典でのボランティアなどを行っています。現在の登録者数は、202人。

みんなの思いを一つに！

学習会での案内の様子（昨年8月）

八木　道子さん

語り部活動では、原爆に関するたくさんの質問をいただいているそうです。「関心を持って真剣に参加してくれていることがうれしいですね」。

西本　千尋さん

「今年で3年目の参加、高校を卒業しても、この活動は続けたい」、穏やかに語りながらも、その表情は使命感に燃えています。

被爆遺構を訪ねてみませんか

被爆遺構は日常生活のさまざまな場所にあります。今回ご紹介できるものはごく一部ですが、あなたのお住まいの近くにもあるかもしれません。一度訪ねてみませんか。

①三菱兵器 住吉トンネル工場（跡）

空襲を避けて生産を続けるために造られた工場です。計画された６本のうち、被爆当時には２本が完成し魚雷部品が生産されていました。

②住吉神社の 鳥居・狛犬・クスの木

狛犬は被爆により左足が欠けています。クスの木は幹の部分を残し枝葉は吹き飛ばされていましたが、現在は、枝葉が繁っています。

③平和公園・松山町 防空壕群

爆心地にもっとも近い防空壕群として整備し今年から公開しています。被爆直後の様子が分かる写真や絵などを使って説明板を設置しています。

④被爆当時の地層

被爆当時の地層の中には、家の瓦・レンガ・熱で溶けたガラス・茶碗・針金などを見ることができ、被爆当時の爆心地付近の悲惨なありさまが分かります。

⑤立山防空壕

長崎県防空本部として県知事らが集まり、警備や救護の指揮にあたっていたところです。原爆被害の状況を国に伝えたり、各地への救援手配が行われました。

その他の遺構や、詳しい場所については
被爆継承課（☎ 844-3913）へお尋ねください。

「平和のバトンタッチだね」

あなたができる「バトンタッチ」探してみよう

これからの世代の人々には、遺構を見て本物だけが持つ説得力を感じてほしい。そして継承活動に生かしていただければ」と語ってくれました。

継承のために、できることから

お二人の話は、遺構を生かし、思いを次代へ「バトンタッチ」することが大事だということを教えてくれます。

継承活動に加わるということは、大きな一歩。しかし、小さな一歩からでもいいと思います。まず、遺構を見る。そして、感じたことを家族に話す。あなたなりの始めの一歩を踏み出してみませんか。